

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 大志民 彩加

論 文 題 目

現代日本語におけるカテゴリーを形成する派生語の意味分析

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	准教授	李 澤熊
委 員	名古屋大学	教授	堀江 薫
委 員	名古屋大学	教授	杉村 泰
委 員	名古屋大学	准教授	永澤 濟

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、「系」「派」「型（がた）」を接尾辞とする派生語の多義性や意味拡張の様相、そしてその背景にあるカテゴリー化のメカニズムを明らかにすることを目指したものである。具体的には、「系」とそれに前接している要素を X とした [X+系] 構文（例：「アジア系」「草食系」など）、「派」とそれに前接している要素を X とした [X+派] 構文（例：「印象派」「猫派」など）、「型」とそれに前接している要素を X とした [X+型] 構文（例：「ハート型」「直感型」など）を考察対象とし、これらの派生語の意味形成の仕組みについて、認知言語学におけるカテゴリー化の概念や構文理論の考え方を援用し、豊富な実例を用いて、緻密かつ精緻な分析を行っている。以上の考察により、「現代日本語において事物がどのようにカテゴリー化されているのか」という仕組みの一端を明らかにしている。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

### [本論文の概要]

第 1 章では、研究の目的と考察対象、及び本論文の構成について述べている。

第 2 章では、本論文の基盤となる理論的背景について概観している。まず、従来の語構成論において接尾辞や派生語がどのように規定されているかを確認し、考察対象語を接尾辞として位置づけている。また、認知言語学における「カテゴリー（category）」および「カテゴリー化（categorization）」の概念を確認し、さらに、本論文が依拠する「構文理論（construction grammar）」について概観している。

第 3 章では、以上の理論的背景を踏まえて、[X+系] 構文の意味分析を行っている。具体的には、ボトムアップ的な手法を採り、個々の事例の意味記述を踏まえて、その共通点として抽出できる意味を [X+系] 構文が有する 1 つの意味として認定し、最終的に 9 つの意味を設定している。また、[X+系] 構文の複数の意味の相互関係を比喻による意味拡張という観点から検討し、その大きな意味拡張の方向性については、単純語の「系」の意味との関係から考察している。

第 4 章では、接尾辞「派」と、それに前接する要素 X から成る [X+派] 構文の多義性、及び意味拡張の様相について考察している。具体的には、個々の事例の意味記述を踏まえて、ボトムアップ的に 4 つの意味を認定し、[X+派] 構文における「メトニミー的用法」の実例の意味についても検討している。また、[X+派] 構文が現れる事例の形式的特徴を検討し、前接する要素の品詞やどのような形式によって用いられるかを考察している。特に、[X+系] 構文と比べると、品詞の偏りは見られつつも、[X 派 Y] [X 派の Y] [Y は/が X 派だ] という 3 つの形式によって [X+派] 構文が用いられることを確認し、それらの形式に共通する [X+派] という形式を構文として捉えて分析することを確認している。そして、その多義性を検討する上では、特に上述の 3 つの形式のうち、Y の要素との関係を捉えることが重要であることを主張している。

第 5 章では、接尾辞「型」と、それに前接する要素 X から成る [X+型] 構文の多義

## 論文審査の結果の要旨

性、及び意味拡張の様相について考察している。まず、個々の事例の意味記述を踏まえて、その共通点として抽出できる意味を[X+型]構文が有する1つの意味として認定し、最終的に6つの意味を設定している。また、[X+型]構文の複数の意味の相互関係を比喻による意味拡張という観点から検討し、その大きな意味拡張の方向性について、単純語の「型(かた)」の意味との関係から考察している。具体的には、単純語として用いられる「型」の意味やその諸特徴を検討し、接尾辞の「型」が単純語の「型」からの文法化の兆候として捉えられる「分岐」(Hopper 1991)の段階にあることを指摘した上で、意味特徴の漂白化や文法カテゴリーにおける脱範疇化が起きていることに基づき、文法化の過程を明らかにしている。

第6章では、句や文が前接する[X+系]構文、[X+派]構文、[X+型]構文の事例を挙げ、このような用法は第3章から第5章において考察対象とした派生語の意味からの拡張であるということから、「拡張的用法」として位置づけた上で、各派生語におけるどの意味からの拡張的用法であるかを、実例に基づいて詳細に検討している。

第7章では、本論文のまとめと今後の課題について述べている。

### **[本論文の評価]**

本論文は、「系」「派」「型」を接尾辞とする派生語について、その多義性や意味拡張の様相を明らかにしたものである。本論文が高く評価できるのは以下のような点である。まず、考察対象語の意味用法について定着度の高い事例だけでなく新奇な事例も含め、詳細かつ丁寧に記述されており、日本語教育の分野にも貢献できる内容となっている。また、「系」「派」「型」という3語の分析から、様々なカテゴリーの成し方を明らかにしようと試みた点は、言語の本質を考える上でも重要な着眼であり、独創的なものがあると評価できる。さらに、意味分析のプロセスが分かりやすく明示されており、論文全体の構成も適切である。

一方、審査員からは以下のような指摘もあった。まず、新奇な意味用法が生成される仕組みや動機づけを明らかにするためには、共時的な側面だけでなく、通時的な側面も視野に入れる必要がある。また、3語の意味分析において、百科事典的意味の概念を使う理由や妥当性について、より説得力のある記述が求められる。次に、「生態系」のような一語化したものを考察対象に含めない理由について、構文理論との関連性も含めて、より明確な根拠を示すべきである。さらに、本論文で援用する構文理論は、いわゆる従来の構文文法(理論)の分析手法とは異なるため、用語の使い方も含めて、誤解が生じないような記述とすることが求められる。

上記のようなさらに検討・改善すべき点はあるものの、全体的にまとまりのあるものに仕上がっており、完成度の高い論文であると評価できる。以上の評価から、審査員全員一致して、本論文が博士学位に相応しい内容と水準を備えていると判断した。